

失われる記憶、もしくは隠された記憶

—三島由紀夫の豊饒の海(四)『天人五衰』の結末をめぐって—

大井映史

要旨

本論では三島由紀夫の豊饒の海（四）『天人五衰』の結末を取り上げ、人間の記憶と忘却、夢と死に隠される生を論じる。果して、聡子は六十年前の記憶を本当に失ったのか、それとも故意に、胸の奥に隠蔽したのか。六十年という歳月の経過は、聡子を変えたのか変えていないのか。時は廻るのか廻らないのか。本多が行き着く先にあるのは、暗い運命の必然か、或いは聡子の悟りが開く「幸魂¹⁾」に他ならないのか。Seidenstickerの英訳を押さえて、日本語と英語、それぞれの感情表現に潜む文化的な相違を読み取りながら、『天人五衰』の結末再考を本論の目的とする。

キーワード：記憶、忘却、生まれ変わり、偶然と必然、夢と輪廻、転生

序論

人間の記憶は必ずしも時の流れに沿って整然と並べられるものではない。記憶とは不確かな一瞬に刻まれ、その傷を脳裡に焼き付ければ、後は忘却の彼方へと遠く消え去って行くもののように思われる。が、記憶は脳の古層から突如として浮かび上がり、蘇りもするのだ。記憶があるということは今があることの証でもあって、今この時は死を目前にしても尚、必然的に未来を志向せざるを得ない。それが時間の掟なのだ。ならば、その先に待つのは悟りであり解脱であって、主人公の聡子が自らを幽閉した月修寺の庭園、涅槃である。聡子は時間を止めることで、生まれ変わりや夢と輪廻、あるいは転生という偶然的な逸脱を実現するのである。

八十一歳の老人になっている本多は、どうしても六十年前の清顕の辛苦をわが身に味わねばならぬと思っている。(J633-634)²⁾それを理由に、彼は月修寺を再訪する。道の行く手を遮る木蔭の一つ一つが、本多には、あらたかで神秘に思われる。その思いを、Seidensticker は“a sort of mystic quiet” (S225)³⁾と訳出する。過ぎ去った六十年という時間に、不思議な静寂を読み取るのである。本多の心には、転生の神秘というより、むしろ心の襞に層を為して秘められた記憶の午睡があるのだと知れる。

六十年の歳月を経て、八十一になった本多がついに月修寺の山門に立つ場面である。

He passed the black gate. The mountain gate lay ahead. So finally he was at the Gesshuji. He had lived these sixty years only to come again. (S228)

黒門を過ぎ、山門が見えてくる。本多はようやく月修寺に辿り着くのだ。本多には、この地を再訪するためにこそ、六十年という歳月を生きたという万感の想いがある。

老いた本多は何度か休息を求めて腰を下ろす。そして、木蔭には原因があると思ひ至る。“There was a reason for the shadows, but Honda doubted that it was in the trees themselves.” (S225) 山門に続く道は木蔭に覆われ、涼しげにさざめいている。今は夏の木蔭に、本多は六十年に及ぶ年輪を刻んだ樹々が内に秘める、隠された生の輪廻を怪しみもする。そこは、かつて清顕が春の雪について、死を賭して通った場所なのだ。死を目前にして、消え去ろうとする記憶の中に、本多は今も尚、生きてあるはずの過去を呼び覚まして、清顕が抱えた痛みと死をわが身に重ね、八十一年に及ぶ生涯を全うしようというのである。

四つ目の木蔭が静かに本多を誘う。そこへ来て崩折れるように、路傍の栗の根方に腰を下ろす。本多は極度の現実感を以て考える、「劫初から、今日このとき、私はこの一樹の蔭に憩うことに決っていたのだ」と。(J635) Seidensticker 訳は次の通りである。

“In the beginning,” thought Honda, as if of undisputed reality, “it was decided that I would rest on this day at this moment in the shade of this tree.” (S225)

本多にはついに回帰すべき出発点に立ち返った安堵がある。しかし決着は始まりにあって、後は運命の必然、それが疑う余地のない真実であるかのように本多は考える。

木蔭には原因があろう。が、無論、その原因は樹そのものに留まるものではない。そこは春の雪について、本多が清顕を支えて幾度も通った道であって、本多の記憶に焼きつけられた清顕との友情の証でもあるのだ。しかし、換言すれば、夏の陽射しに苦しみながら、木蔭に休みながら、本多が今になって訪れる月修寺は、清顕が聡子に会えずに終わった月修寺ではなく、本多の記憶に懐古される別の世界に属して、当然、そこには清顕も聡子も既に存在してはいない。ならば、本多の思惑は裏切られている。だから、本多自身、もはや今世で聡子に会うことは叶うまいと思って来た。たとえ、この場で、

この世の最後の時最後の場所で会えずとも、いつか会える日のあることを彼は信じようとして来たし、信じられるような思いを胸に抱いて、次世での再会を期して来たのだ。輪廻の轡が贖いを求めるからである。

再び現れた一老が、執事の耳に何事かを囁き、執事が本多に告げる。

... The old nun appeared again, and whispered something in the steward's ear. "Her Reverence has informed us that she is ready to see you," he said, in the accents of this West Country. "Come with me, if you will, please." Honda wanted to believe his ears. (S231)

執事が「間もなく御門跡がお会いになる言うて居られますから、どうぞあちらへ」と挨拶したとき、本多はわが耳を疑わざるを得ない。信じたい思いにも益して、信じ難い思いに驚くのである。六十年という時の流れを省みれば当然ではあろう。しかし、清顕の死を以って本多が聡子を訪ねる理由は失われている。今になって聡子が本多を月修寺に招き入れる必然性のあるはずもない。それでも門跡との再会が叶うものなのかどうか、本多は諦念を以って結末を待つほかはない。

北向きの小庭に面した客間は障子が開け放たれて、庭の緑があまりに強く目を射るので、通された当座は分からない。Seidenstickerの訳は夏の緑の光とかつて本多が門跡に引見された同じ部屋の光と影の対照を強調する。

"The green light from the northern garden was too strong, and for a moment he did not recognize it; but it was here, sixty years before, that the Abbess's predecessor had received him. (S231)

六十年前、そこにはかつて花やかな月次屏風があった。今は、そこに葎の風炉前がある。本多はかつて冷え冷えとした部屋で、御先代の門跡に引見されたことを覚えている。寂として、雪白の障子が霧のような光を透かしていたことも⁴⁾。

今は蟬の啼きしきる茶庭の緑が燃えている。夏の光は老いた本多の目には強すぎる。本多に憩うことが許される居場所はこの世の光の中にはない。彼の記憶の残滓の中だ。本多は目を眩まされながらも今一度過ぎ去った過去の記憶を辿り、聡子の心に清顕を映そうとする。

聡子との再会は、本多が予期しない展開を見せる。その発端が次のように語られる。

A beating of wings seemed almost to strike the wall. A sparrow flew in from the gallery and on again, its shadow wavering against the white wall. (S232)

壁にぶつからんばかりの羽ばたきが本多を振り向かせる。渡り廊下から飛び入った雀の影が白壁に乱れて去る。夏の光が鋭く落ちて裏山の雑木林の空の白光と相応じている。(J642) 聡子が生きて来た月修寺は、明らかに、その佇まいをすっかり変えて、また別の世界を具現しているのだ。

本多は六十年の時を刻み、ここを再訪するためにのみ自分は生きて来たのだという想いを募らせる。が、老いた本多が過去を辿り、贖いを求めて記憶の道筋を辿る時、末那識の支配に置かれて本多は迷蒙を免れ得ない。⁵⁾ 生々流転する自然の営為の中で、記憶そのものが既に忘我の流れに飲み込まれている。本多は個人として、今一度己の五衰を映すほかはない。

生涯の夢の死滅を前にして、再び甦りの神秘を我が手に確かめるべく、本多老人は月修寺を訪れる。⁶⁾ 本多は八畳に六畳の次の間つきの御寝殿に案内される。六十年という月日を経て、聡子は本多を月修寺に招き入れる。ついに聡子との再会が叶うのである。

目前に青やかな頭をして濃紫の被布を纏うこの人が、一目で八十三歳になった聡子だと分かる。

... The pale figure in a white kimono and a cloak of deep purple would be Satoko, now eighty-three. Honda felt tears come to his eyes. He was powerless to look up at her. (S232)

本多は涙を浮かべて目を上げることに叶わず、過ぎ去った六十年という歳月の流れを思わずにはいられない。

感傷に浸る本多には、聡子との再会は確かに一つの決着ではある。しかし、本多は聡子が月修寺で過ごした六十年に意味を読み取って自らに問わなければならない。

The bloom of youth had in a jump of sixty years become the extreme of age, Satoko had escaped the journey through the gloomy world. (S232)

聡子は浮世のしがらみを免れて、六十年を一足飛びに老境に至ったかのように思われる。六十年という歳月も、聡子には庭の橋を渡って日陰から日向へと出るまでの、ほんの一瞬に過ぎなかったかと本多は思う。聡子は玉のような老いを結晶させ、皺が夥しくても清らかで、やや屈んで小さくなった体も何処か花やかな威を含み、美しく輝いているのだ。(J642) “Age had sped in the direction not of decay but of purification.” (S232) 衰えを拒めない本多とは対照的に、聡子は一途に、浄化の方向へと走っていると知れるのである。

本多は涙を隠して頭を上げる。門跡は朗らかな声で応じる。かつてなかったことだ。

“It was good of you to come,” said the Abbess pleasantly.

“It was rude of me to introduce myself without warning, and it is very kind of you to see me all the same.” (S233)

狎れてはいけないと思いつつも、聡子に会えたことで、本多はかえって堅苦しい挨拶をしていることに気づくが、己の咽喉から出る痰の絡んだ年寄りくさい声を恥じ入ることになる。

本多は強いて言葉を繋ごうとする。

“I addressed myself to your steward. I wonder if he was kind enough to show you my letter.”

“Yes, I saw it.” (S233)

門跡の口調は決然としている。御附弟が門跡を残して去ると、本多が口を切る。

“How the memories come back. As you can see, I am so old that I cannot be sure of lasting the night.” (S233) Seidensticker は「お懐しゅうございます」を “How the memories come back.” (S233) と訳出する。記憶はどのように蘇るのか、「私もこの通り、明日をも知れぬ老いの身になりまして」と本多が言う。

本多が己の死期の近いことを語る軽佻さに、門跡はかすかに揺れるような笑いを浮かべて言う。

“Your interesting letter seemed almost too earnest.” Like the steward, she spoke the West Country dialect. “I thought there must be some holy bond between us.” (S233)

本多の文面は興味深く、熱心すぎるほどに思われると、関西訛りの聡子が明るく語る。さらに、本多との間にも聖なる縁があるに違いないと。本多は聡子の言葉に勢いを得、六十年前に立ち戻って俄かに昔日の熱情を逆らせようとするが、今更に亡き友の心を庇う道理はない。聡子の笑みは、今世に生きる人の生死を遥かに超越した悟りに通じるものだ。

しかし本多は、自ら殊更に怒りを覚えようとする。

The last drops of youth leaped up within Honda. He had returned to that day sixty years before, when he had pleaded youthful ardor to the Abbess's predecessor. He discarded his reserve. “Your revered predecessor would not let me see you when I came with Kiyooki's last request. It had to be so, but I was angry. Kiyooki Matsugae was after all my dearest friend.” (S233)

六十年前の月修寺訪問を思い起こせば、清顕最後の願いは聞き入れられず、清顕を聡子に合わせる事が出来ないまま、本多には先代の老門跡に向かって遠慮も捨てて、今一度清顕を聡子に合わせようと熱情を逆らせた時がある。最後の願いが叶えられず、悔いを残して、本多は御先代を恨みにも思ったことを打ち明ける。だからこそ本多は清顕と聡子の絆を信じ、過去に拘る。本多はそこに己の存在を介在させる他はないのである。現実的な本多の執着は親しい友人に対するものであるというより、聡子と清顕の輪廻転生の神秘を司って、脳のさらに古層に潜む記憶を蘇らせようとするものだと言えるかも知れない。聡子の関西訛りは板についている。聡子は本多とは別の世界に生きて来たし、別の世界に生きて死んでいく人間である。そして清顕もまた、その道に生きて死んだのである。

聡子は本多に問いかける。

“Kiyooki Matsugae. Who might he have been?” Honda looked at her in astonishment. She might be hard of hearing, but she could not have failed to hear him. Yet her words were so wide of the mark that he could only believe he had been misunderstood. (S233-234)

清顕が誰のことかと問われて、本多は驚いて聡子を見る。耳が遠いのかと思われもするが、聞こえていないとは思われず、聡子の言葉も確かであって、本多は誤解されていると考えるしかない。

“I beg your pardon?” He wanted her to say it again. There was no trace of dissimulation as she repeated the words. There was instead a sort of girlish curiosity in her eyes, and below them a quiet smile. (S234)

繰り返される本多の問いに、聡子は童女のような好奇を目に浮かべて静かな微笑を湛えている。

... “Who might he have been?” Honda saw that she wanted him to tell her of Kiyooki. Scrupulously polite, he recounted his memories of Kiyooki’s love and its sad conclusion.

The Abbess sat motionless through the long story, a smile always on her lips. Occasionally she would nod. She listened with care even as she gracefully took the cold refreshments the old nun had brought in. (S234)

「その松枝清顕さんという方はどうゆうお人やした？」との問い掛けに本多は目を瞠かされることになる。本多の記憶の中に、聡子には通じ合える筈だと思われていた根拠が覆される瞬間である。本多は聡子が清顕のことを聞いたがっているのかと思うが、そうではない。戸惑いながらも礼を尽くし、本多は清顕の恋やその悲しい結末について記憶のままに物語る。門跡は笑みを絶やさず、端座したまま相槌を打っている。本多の話聞き漏らさずにいるのが分かる。

聴き終わった門跡は何一つ感慨のない平淡な口調で言う。

Calmly, without a touch of emotion, she said: “It has been a most interesting story, but unfortunately I did not know Mr. Matsugae. I fear you have confused me with someone else.” (S234)

面白い話だが、門跡は松枝清顕という人を知らない、人違いではないかと穏やかに問い掛ける。だとすれば、聡子は記憶を失ったのか隠蔽したのか。ここへ来て感慨のない聡子の平淡な口調は、その視線の先には虚空以外、何もないのかも知れないとも思われる。

本多は咳き込みながら聡子の姓名を出して訴える。

“... But I believe that your name is Satoko Ayakura ?”

“That was my lay name.”

“Then you must have known Kiyooki.” He was angry. (S234)

綾倉聡子は俗名に過ぎないというのが門跡の返事だ。ならば現世の名で清顕を知らないはずはないと本多は反駁する。本多にとっては六十年の夢が、この刹那に裏切られることにもなりかねない。しかし門跡は本多の追究にたじろぐことなく、暑熱でも紫の被布を涼やかに着て、声も目色も少しも乱れることがない。

決して怒ったりはしない穏やかさに満たされて、本多がしばらくの沈黙を経ると、門跡が再びなだらかに美しい声で語る。(J645-646)

“No, Mr. Honda, I have forgotten none of the blessings that were mine in the other world. But I fear I have never heard the name Kiyooki Matsugae. Don't you suppose, Mr. Honda, that there never was such a person ? You seem convinced that there was; but don't you suppose that there was no such person from the beginning, anywhere ? I couldn't help thinking so as I listened to you.” (S234 - 235)

聡子はしっかりとした口調で静かに語る、「いいえ、本多さん、私は俗世で受けた恩恵は何一つ忘れはしません。しかし松枝清顕さんというお方は、お名をきいたこともありません。そんなお方は、もともとあらしゃらなかったのと違いますか？ 何やら本多さんがあるように思っているだけで、実は初めから何処にもおられなんだ、ということではありませんか？」聡子は逆に本多の記憶を疑うかのように問いかける。「お話をこうして伺っていますとな、どうもそのように思われてなりません。」本多は己の存在の自明性を問われることになるのである。(J646)

本多はもう一度門跡に食い下がる。

“Why then do we know each other ? And the Ayakuras and the Matsugaes must still have family registers.” (S235)

何故わたしたちは互いを知っているのか、綾倉家と松枝家の系図や戸籍にも記録が残っているはずだと本多は訴える。が、「俗世の結びつきならそういうものでも解けましようが、清顕という方には、本多さん、あなたはほんまにこの世でお会いにならっしゃったのですか？ また、私とあなたも、以前たしかにこの世でお目にかかったのかどうか、今はっきりと仰言えますか？」と問い返す。それが現実という別の世界を離れた聡子の信念であり悟りであることには間違いない。

たしかに六十年前ここへ上がった記憶があると本多は信じている。しかし、聡子の心は決まっているのだ。

“Memory is like a phantom mirror. It sometimes shows things too distant to be seen, and sometimes it shows them as if they were here.”

“But if there was no Kiyooki from the beginning ——”

Honda was groping through a fog. His meeting here with the Abbess seemed half a dream. (S235)

記憶とは実体のない鏡のようなものだと言子に語る。映る筈のない遠すぎるものを映しもしれば、それをすぐ近くにあったもののように見せもする、幻の眼鏡だとも。しかし、本多は雲霧の中をさまよう心地に襲われて嘆息する。もしも初めから清顕がいなかったとしたら、今、ここで門跡と会っていることも半ば夢のように思われて、本多は初めて、失われてゆく己を認めざるを得なくなる。何処かで時間がジャンプし、個別の時間が個別の物語を形づくって、ついには大きな円環を為すに至るのか。⁷⁾

本当に清顕という人を知っているのか、そして、本多が言子に会ったことは確かなのか。

He spoke loudly, as if to retrieve the self that receded like traces of breath vanishing from a lacquer tray. “If there was no Kiyooki, then there was no Isao. There was no Ying Chan, and who knows, perhaps there has been no I.” (S235)

漆の盆に吐きかけた息の曇りが、みるみる消え去って失われてゆくように、自分を呼びさまそうと、本多は思わず叫ぶ。「それなら、勲もいなかったことになる。ジン・ジャンも、その上、ひよっとしたら、この私ですらも…」(J646)

初めて、言子はやや強く本多を見据えて言う。「それも心々ですさかい」

For the first time there was strength in her eyes.

“That too is as it is in each heart.” (S235)

人それぞれの心の中にある世界で、すべてが紡がれてゆくものと言子は説くのである。

静寂が続き、門跡がしめやかに手を鳴らす。御附弟が現れて闕際に指をつく。遠くからの来訪に応え、門跡は自ら案内して本多に南の庭を御覧に入れましょうという。

A long silence ensued. The Abbess clapped gently. The novice appeared and knelt in the doorway.

“Mr. Honda has been kind enough to come all this way. I think he should see the south garden. I will take him there.” (S235)

案内する門跡の手をさらに御附弟が引く。本多は操られるように立って二人に従い、暗い書院を過る。御附弟が障子をあげ、縁先へ本多を導く。広大な南の御庭が、たちまち一望の裡にある。一面の芝の庭が裏山を背景にして烈しい夏の日に輝いている。

The novice led her by the hand. Honda stood up as if pulled by strings, and followed them through the dark rooms.

The novice slid open a door and led him to the veranda. The wide south garden

was before him.

The lawn, with the hills behind it, blazed in the summer sun. (S236)

「今日は朝から郭公が鳴いておりました」と、未だ若い御附弟が言い、視線は庭の細部に向かう。夏にも拘わらず青葉の中に炎を点じる楓、編み枝で作られた門は山に繋がりと、枝折戸が見える。のびやかに配された庭石、石の際に花咲いた撫子。左方の一角に古い車井戸が見え、また、見るからに日に熱して、腰かければ肌を灼きそうな青緑の陶の榻が芝生の中程に据えられている。裏山の頂きの青空には、夏雲がまばゆい肩を聳やかしている。

“We have had cuckoos since morning,” said the novice. The grove beyond the lawn was dominated by maples. A wattled gate led to the hills. Some of the maples were red even now in the summer, flames among the green. Stepping-stones were scattered easily over the lawn, and wild carnations bloomed shyly among them. In a corner to the left were a well and a well wheel. A celadon stool on the lawn seemed so hot in the sun that it would surely burn anyone who tried to sit on it. Summer clouds ranged their dizzying shoulders over the green hills.

It was a bright, quiet garden, without striking features. (S236)

これと云って奇巧のない、閑雅な、明るくひらいた御庭である。

数珠を繰るような蝉の声がここを領している。そのほかに何一つ音とてなく寂寞を極める。

Like a rosary rubbed between the hands, the shrilling of cicadas held sway. There was no other sound. The garden was empty. He had come, thought Honda, to a place that had no memories, nothing.

この庭には何もない、記憶もなければ何もないところへ来てしまったと本多は思う。

The noontide sun of summer flowed over the still garden. (S236)

結 論

この庭には何もない、記憶もなければ何もないところへ来てしまったと本多は思う。しかし、本多の目には何もないところ、そこに聡子が生きた無我の世界があるのだ。何もないのではなく、清顕と聡子への本多の思いは遠く勲やジン・ジャンに連なり、無に帰して時を超え、生まれ変わりや夢と輪廻、転生の不可思議に通じる始まりへの永劫回帰⁸⁾という未来への暗示を生じている。

その布石は月修寺の庭に敷かれて有る。例えば恥しげに咲く撫子は生まれ変わりを想起させる花である。⁹⁾ また、「数珠を繰るような蝉の声がここを領している」という下り

も、転生の願いを込めた祈りの充溢を物語って豊饒の海に通じる。

人間の記憶は必ずしも時の流れに沿って整然と並べられるものではない。記憶とは不確かな一瞬に刻まれ、その傷を脳裡に焼き付ければ、後は忘却の彼方へと遠く消え去って行くものには違いない。が、記憶は脳の古層から不意に浮かび上がって蘇りもするのである。

『春の雪』とは対照的に、『天人五衰』は本多の生涯を賭けた夢の死滅を辿る一方、月修寺に籠もって生きる聡子の変容を中心とする物語である。聡子は唯一の“Static Character”で、月修寺の庭に涅槃に匹敵する聡子の世界を顕在化させる。何もないと思われるところ、月修寺の庭に全てが繋がっていて、そこに衰亡があれば解脱もある。

記憶とは実体のない鏡のようなものだという聡子の悟りは、無に帰してゆく意識の問題でもある。¹⁰⁾ 聡子が言うように、すべては人それぞれの心の中にある世界で織り上げられてゆくものなのだ。何もないと思われるところ、目には見えない心の内に、聡子の恋が隠されている。聡子への清顕の想いも、そこに眠っている。夢と輪廻と、脳の古層に潜む記憶の神秘は、偶然にも増して必然が心々に命を紡ぎ、過去の記憶を未来への橋渡しとして、初めて円環を完成する。

庭は夏の日ざかりの日を浴びてしんとしている。その静寂の中に記憶は眠る。

注

- 1) 幸魂（愛や慈悲を司る）：作者は『天人五衰』 豊饒の海 第四巻について、「書かれるべき時点の事象をふんだんに取込んだ追跡小説」で、『幸魂』へみちびかれゆくものだと語る。（三島由紀夫全集35 p. 410-412からの引用）
- 2) 引用は『天人五衰』豊饒の海（四）三島由紀夫全集14 p. 633-634から。以下、本文からの引用に際しては、カッコ内に日本語文からの引用であることを示す」と、ページ数のみを記す。
- 3) Edward G. Seidenstickerによる英訳: *The Decay of the Angel, A Nobel by Yukio Mishima*, Translated from the Japanese by Edward G. Seidensticker. (New York: VINTAGE INTERNATIONAL EDITION, April 1990 Copyright©1974 by Alfred A. Knopf, Inc.) からの引用については、以下、カッコ内に Seidensticker の英訳からの引用であることを示すSと、ページ数のみを記す。
- 4) 『春の雪』豊饒の海（一）三島由紀夫全集13 p. 267から。この下りは『春の雪』で聡子が清顕と交わす運命的な会話に重なる。「君はのちのちすべてを忘れる決心がついているんだね」「ええ。どういう形でか、それはまだわかりませんが。私たちの歩いている道は、道ではなくて棧橋ですから、どこかでそれが終わって、海がはじまるのは仕方がございせんわ」棧橋は海に閉ざされ、渡りきることのできない道であって、聡子は別世界に、清顕とは次元を異にする世界に生きなければならないことを悟っている。
- 5) 末那識は根源的な心である阿頼耶識を対象とし、それを自分であると考えて執着し続ける。この深層に潜む自我心を滅することによって、人は初めて真の無我行を実践することが出来ると言われる。（フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』）

- 6) 臨濟宗南禅寺派円照寺 尾崎の高台に建つ円照寺本堂の向って右手に、江戸時代初期の作庭と伝える庭園がある。この庭園は、北面する山麓の傾斜地を巧みに利用して築造された林泉庭園（築山山水）で、堺区には低樹を配植して生垣とし、後方の山地を樹林越しに借景とするが、庭区の左端は堂後に及んでいる。また、後世に一部改変を受けている。

庭景は、前面に大きく心字型の池を設け、池中には中島一箇を置く。池の中央彼岸には、此岸に向けて張り出す大きな起・臥の両石を配し、そのやや右には石橋を架して逍遙の細径を通じている。池畔に岬、入江、曲浦などを屈曲してつくりだす石組みを護岸とし、園内の山径には処々、飛石を配してつつじを添植し、池畔は密に、平庭は疎として大小のつつじを配植する。巨石を中尊とする三尊石は、引水の容易な庭区左方の築山上に築かれ、直下の石組みから池畔の間を、深山幽谷に見たてて飛瀑二段に懸かる石組みとし、谷の半ば左岸には添景の六角石幢（南北朝期）一基を建て、下流の瀑端はつつじと跳石の隠顕にまかせている。本庭園は、小庭であるが、市域では国指定の万徳寺庭園に次ぐ佳園として価値高いもので、保存も極めて良好である。なお、毎年5月末から6月の頃、楓の枝葉に泡状の卵壘を産みつけた森青蛙が、園池に重く垂れ落ちる神秘的な生命の営みを見ることができる。（http://www.city.obama.fukui.jp/section/sec_sekaiisan/Japanese/data/024.htm）
- 7) 昭和四十四年二月六日付けの『毎日新聞』に作者は自作解説文を書いている。「どこかで時間がジャンプし、個別の時間が個別の物語を形づくり、しかも全体が大きな円環をなすものが欲しかった」私は小説家になって以来考え続けていた、「世界解釈の小説」が書きたかったのであると。（林進著『三島由紀夫とトーマス・マン』、鳥影社、1999、p. 47）からの引用。
- 8) 三島のペンは徹底して負の方向へ読者をいざなってゆく。…人間を呪詛する口調にも冷たく暗いシニシズムがきわだつ。「欺瞞や悪はきちんと時計のように動いているか？…どこを探しても愛がないという状態は、きちんと保たれているか？」「情熱は必ず笑いものになるように細かく配慮されているか？ 人々の魂はちゃんと死んでいるか？…」出口裕弘著『三島由紀夫・昭和の迷宮』（新潮社、2002、p. 108-109）からの引用。
- 9) 撫子（Carnation または西洋石竹はロルカの『血の結婚式』では夢と眠りに関連づけられる。アト・ド・フリース著、山下主一郎主幹、荒このみ他共訳 *DICTIONARY OF SYMBOLS AND IMAGERY*（大修館書店、1984、p. 106）からの引用。
- 10) 意識 意識とは自我と心的内容との関係である。無意識的現象は自我とはあまり関係を持たないので、その存在を否定する者もあるが、人間行動の中にはっきりと現れる。意識が心の全体1を把握することはとうていできない。多くのことが半ば意識的に起こり、同じくらい多くのことが完全に無意識の内に経過していくという。（C. G. ユング著、林道義訳『個性化とマンダラ』、みすず書房、1991、p. 50）からの引用。